史料紹介

エリザベス・ギャスケル『マイ・ダイアリー』①

笹川真理子 訳

エリザベス・ギャスケル夫人（一八一〇――六五）は、イギリス、ヴィクトリア朝における女流小説家として、特に、処女作『メアリー・バートン』においてよく知られている。

ギャスケル夫人は、結婚の翌年、最初の子を死産した為、一八三四年九月十二日、この日記の献ぜられた長女マリアンヌが生れた時には、母なる喜びはひとしおであった。幼い生命をもった娘への限りない愛と、初めて母となった不安は、日記に色濃く表われている。日記は、一八三五年三月十日から一八三八年十月二十八日まで書かれており、その間に二女ミータも生れている。よってこれは、育児の合間に書きつけられた、マリアンヌの生後六か月から四歳一か月までと、ミータの一歳八か月までの成長記録といえる。

史料として紹介していく以下の日記は、マリアンヌの息子、つまりギャスケル夫人の孫によって、ギャスケル研究家のクレメンス・ショーターの手に渡され、一九二三年、私的に五十部の限定出版をなされたものの翻訳である。

私のいとしいマリアンヌ！　あなたにこの本を「献げ」ます。もし、私が自分の手でこれをあの娘に手渡す日まで生きていなかったとしても、この本は、幼い娘の人格の育成に注がれた母の愛と不安に打震えた日々の形見として、あの娘のためにとっておいてもらえることでしょう。あの小さな娘が、いつか母となった日には、他の母親の経験に興味を持つかも知れません。恐らく少なくとも、自分の幼い時の人となりについて知りたいと思うでしょう。私は、（もし、あの娘がこれを見たならば）、私達を分かち難く結び合わせている愛と希望の片鱗にでも触れてくれたらと願っています。その愛は地上のすべての愛に優るでしょうし、その希望は、たとえお互いがこの地上では別れ別れになったとしても、この世にある限りよく生きようと努めることが、母と娘を結ぶ愛の絆、それは限りなく尊いものでありながら切れやすくもろいものでもあるのですが、それをより直して、再び結び合わされますようにという希望なのです。

一八三五年三月十日　火曜　夜

あさってでマリアンヌは六ヵ月になります。私は、このささやかな日記をもっと早く始めていたらよかったのにと思います。なぜなら、(十二ヵ月前には、この考えを一笑に付したことでしょうに)もうすでに性格の多くの兆しや何かが現われて来ているのですが、それを今はもうはっきりと思い出せないからなのです。まず、私はあの娘を精神的にとらえてみましょう。あの娘はとても機嫌の良い子と言えるでしょう。それは時々は小さなかんしゃくをおこして、短気という言葉がぴったりの時もありますけれど。それにまた、あの娘は小さな事にとても強く我を張ることもあります。私が思うには、本当に頑固なのですが、そんな言葉はこんなかわいい娘にはあてはまらないものなのです。しかし、概してあの娘はとてもいい子なので、私は私の手に授けられたものが、あまりにもすばらしく美しいので、十分に感謝し尽せないように思われます。ところが、それが責任を重くしているようなのです。万一、私が不注意に、あるいは気のゆるみから、誤った方向へ導いたなら！　故意になんて、母の心にはありませんから。無知や判断の間違いから、誤った方へ導くかもしれませんし、恐らく頻繁にそういう事がおこるでしょう。でも、ああ神様！　私を正しくお導き下さい(それがあなたの御心なら)。そして、今感じているこの強い責任感を、私に持ち続けさせて下さい。そして、おまえもね、私のいとしい娘よ、もしこれを読んで、おまえの小さい時に犯した私のあやまちを知っていやな気持になったとしても、どうぞ私を許してね！

マリアンヌは、今や日ごとにおもしろくなってきています。あの娘は何でも見てつかもうとします。今では、かなり距離に対する感覚がでてきて、二ヵ月前までしていたように、光の筋をつかもうなどということはしません。あの娘の視覚は、最近とても発達し、遠くの物が見えるようになったばかりでなく、それらを区別できるようになりました。たとえば、今日、私は居間であの娘を抱いていて、パパは門を出ようとしていたのですが、あの娘は確かにパパを知って、笑って足をけったのです。あの娘は、好きな人にはっきりとした好意を示し始めています。私の所へ来ようと、小さな手をさし出します。きっとパパにもそうすると思います。あの娘は、顔の表情をとらえて、すぐにそれに合わせようとします。たとえば、私達が笑えばあの娘は笑います。また、私がウィリアムの朗読に耳を傾けている時、あの娘がまるで言葉を全部理解しているように、真剣な、まじめな顔をしているのを見るのは、何ともおかしいものです。私は、あの娘の関心を引いたものは何でも、あの娘が見たいだけ見させるようにしています。そして何かとても一心に見ていると思われる時には、あの娘をそこへつれて行き、その物にあの娘のあらゆる感覚を働かせるようにしています。もし害がないと思えば、なめることさえも。私の目的は、あの娘に集中力をつけさせることなのです。

あの娘は目下、動きをとても楽しんでいます—踊ったり、はねたり。そして、むすんでひらいてが大好きです。私は、この年齢の子がこんなに続けざまにしゃべりまくるとは思いませんでした。あの娘は、ちょうど会話でもするように調子を変えながら、叫んだり、つぶやいたりして、自己流に話すのです。あの娘の小さな胸によぎっているものは何なのか、知ることができたらいいのに。あの娘は歌うようなものは何でも好きですが、ピアノはこわがるようです。今日、私がピアノをひき始めたら、泣き出しそうにさえなりましたから。

概して、あの娘は、恐れとか恥ずかしさというものを、何も持っていないようです。あの娘を抱こうとする人の所へは、誰であっても行きます。確かめるために、知らない人をじっと見つめ、彼らが部屋にいる間とても気になるようですが、それでも泣いたり、私にしがみついていることはありません。私はこれはとてもいいことだと思います。あの娘がそうするのは、私にとって大変嬉しくかわいいものなのですが、もし他の人の所へ行くのをいやがる癖がついたら、残念です。

次に、あの娘の「身体」の特徴について。あの娘はなんなく二本の歯がはえました。でも、私はもっと困難な事が待ちかまえていると思います。あの娘はとても太っているので、私達はあの娘に足首を全く使わせないようにしているにもかかわらず、手足が大変じょうぶです。がそれでも私は、歩くのは遅い方がいいと思っています。そうすればその間に、小さな足がずっとしっかりするでしょうから。この点で、召使達がいろいろしてくれるのを押えるのはむずかしいでしょうが、私はあの娘が自分で歩くことを学び、人の助けを得ないようにしたいものです。あの娘はかなり長いこと床に腹ばいになり、足を蹴ったりしますが、それは私が大変早くから習慣づけたことで、あの娘にとっても役立っています。あの娘はおきている内にベットへ行くのですが、これも私が早くに始めた習慣です。一般に行なわれているものかどうかはわかりませんが、大変に満足すべきものです。あの娘は、一、二度ひどく泣いて、私をとても困らせたのですが、あの時あの娘はどこかが痛かった訳ではなく、それどころかとても元気で、ただ抱いてもらいたい為にそうしていることがわかったので、確固たる態度をとることができました。もっとも時々、あの娘と同じ程泣いたこともありますけれど。私はあの娘が眠るまで（極端な場合は除いて）、あの娘の元を離れません。いつもの時間に（六時）ベットに入れられると、あの娘は着がえをしている内に、とても眠くなります。私が着がえの際中に、あの娘に話しかけたり、一緒に遊んだり、興奮させたりするのは好みません。しかし時には、あの娘は寝なければならないのにとても遊びたがるので、部屋を一めぐりするか、二度行ったり来たりするかしてなだめなければなりません。それでもまだおきたままベットに置くことになるのですけれど。またある時は、ちょっと泣いて、私がゆりかごの中であの娘をあおむけにさせると、抱かれるものと思って一瞬泣きやみ、嬉しい時にいつも発するような独特の小さな喜々とし

た声を立てたりもします。

泣き声は私にとって、大変むずかしいものです。本によっても違いますし。ある本には、「泣いてねだる物をけっして与えるな」と書いてあります。また別の本には、(Mme Necher de Saussure の『進歩的しつけ』で、この問題について私の読んだうちで一番良く書かれている本)「子どもの涙はとても非痛なものであるから、なるべく涙を出させない、精神の穏やかな安定をはかることが必要である」と書いてあるのです。ですから、私は自分で、きまりを決めなければなりませんでした。思ったようには、そのきまりを守り通せなかったと反省していますが、これはよいきまりであったと今も思っています。私達は、泣き声は子どもが自分の要求を表わす唯一の言語であるということを知らなければなりません。それは、「おなかがすいた、とても寒い」と言うことを伝える、ささやかな方法なのです。ですから、私は泣いたからと言って、求めるものは何も与えるなという金言を実行しなければならないとは思いません。もし泣いている理由が、あるものを手にすることでしたら、私は不必要に子どもに我慢を強いるよりは、私自身のささいな仕事や目的をあきらめても、すぐにそれを与えるでしょう。でも、子どもがその物を手に入れることが不適当と思われるならば、子どもがどんなに泣いても絶対に与えない方が良いと思います。一・二度泣きおとしをやってみれば、子どもは一声泣くか、さもなければ欲しいものを伝えるだけで十分なことがわかるようになるでしょう。そして泣き癖はなくなると思います。私はこのやり方を不完全にしか守れませんでしたが、それでもマリアンヌの泣く発作を何度も押えたと、ほぼ確信しています。子どもは、初めいらいらさせられて泣くが、次に、泣けばいらいらが解消されることを知って、悪い泣き癖がつくと、どこかで読んだことがありますが、これは本当に的をえていると思います。子どもを何かの原因で—不規則であったり、あるいはあわない食物、着心地の悪い衣服、窮屈な姿勢など—不必要にいらだたせないように、子どもにかなりの犠牲を払うのは、母親たるものの義務であると思うのです。この原則に、私達はもっと心を向けるべきでしょう。

私はいろいろなきまりを定めていますが、そして、これまでの娘への義務を誠実に果たしてきたとは思いますが、そのきまりを必ずしも十分守ってきたとは思われません。私は時々、あの娘の良さは私のきまりが効を奏したからだというおごりが、私の心にあるような気がして不安になります。が、それは本当は、これまでとても健康であって苦痛を受けることもなく、どんなに感謝してもしすぎることはない、神様のお恵みがあったおかげなのです。そう言いながら、こうして洗いざらい書きとめているのですが、それは私が、どんなちょっとしたきまりを作るにも十分考えており、そしてその効果を知りたいと思うからなのです。今こそ、私は、あの娘の躾を通じて進められるこの方針によって行動したいと思います。今晩はたくさん書きすぎてとりとめなくなりました。この日記に表われている私自身の気質や感情と、あの娘

のそれとが、密接に関連しているとは思いません。ただ、あの娘の安らかな寝息は、私がこうして書いている間中、私の思考を促す音楽でありました。あの娘に神の祝福がありますように！

一八三五年八月四日　火曜　夜

あの娘のことを書くのは、ずい分久し振りのように思われますし、ずっとそれをなまけてきたような感じさえします。あの娘について話したり、考えたり、書いたりする時、いつ始めていつ終えたらよいかが、とてもむずかしかっただけなのです。

数日のうちには、あの娘は十一ヵ月になりますが、ある点で、あの娘はやや発達が遅いように思います。たとえば歩行や話し言葉など。私は、あの娘が「ママ」と言っていると思うのですが、それはそんな気がするだけのことなのです。あの娘は、数分間何かにつかまってかなりしっかり立っちができ、それからペタンとしりもちをつくのです。でも、私は、あの娘が自然の成長以上に早く歩いたり、話して欲しいと気ぜわしい気持でいるわけではなく、夫も同じ様に考えているのです。私達は、あの娘なりの進み具合でよいと思っています。

あの娘には、いろんな小さなお得意の芸があります。たとえば、手をパチパチたたいたり、握手をしたり。それらはとてもかわいいものです。時々、私達はあの娘に他の人の前で芸をさせすぎているような気がして、心配なこともありますが。このことは、あの娘が成長するにつれて注意していかねばなりません。あの娘は、「牛はどこにいるの？」「はえ？」などなど、たくさんの単語や文章がわかります。私はあの娘が、怒った表情や時にはうかない表情でさえ、目にするのを、とても心配しています。私には、あの娘が今見たその表情に即座にあわせるのがわかるのです。もし、私達あるいは私が、子どもをしっかりと配慮することができたら、子どもは何と美しい、悪から守られた存在となることでしょう。ああ、私は本当にそう望みます……（著者略）

女の人生というものは、少くとも今、私にはそう思えるのですが、最も偉大で気高い義務の一つである、母親の義務を果たす時期にかかわっていかなければならないのですね。私はすでにあの娘の知的、道徳的教育の多くの事柄について、あまりにも無知であまりにも頼りげなく感じているのですから、あの娘が大きくなって子どもがよくする困らせるような質問をしたら、一体どうしたらよいのでしょう。私は今持っている志と信仰をいつまでも持ち続けたいので、私のあやまちが許されるよう、そして良い道に導かれますようにと祈らねばなりません……（著者略）喜びが苦痛の表情を伴なわないように。たぶんこんな事はばかばかしいことですが、私はあの娘に関することは、何でも書いておこうと思うのです。

あの娘は、この前私が日記を書いてからずっとナッツフォード[1]とウェリントン[2]へ行っていました。そして、ああ、ウェリントンを訪ねてから、あの娘はとても重い病気にかかってしまい、私達

はあの娘を失うのではないかと、それはそれは心配しました。私はもう本当にあきらめようともしました。もうあの娘をこの世で見ることはできないという思いにどんなに心を痛めたかは、言い表わせないほどです。

見てもむなしいあの娘のベット、
ひっそりとした子供部屋、
かつてはあの娘のはしゃぎ声で喜びに満ちていたのに。

私は神への感謝の言葉を心から発することなく口にする習慣を身につけたのではないかと、その言葉を使うのを恐れる時もあります。しかし、神が与えて下さった幸福を奪い去られないことに対して感謝と祝福をささげますと言う時には、そこに何の危具もないと思います。そして、ああ、私があの娘を寵愛の的とするのではなく、あの娘と私が共に、いつの日か来る変化に備えて努められますように。病後、あの娘の気質は、病気中に許された甘やかしによって悪くなりましたが、元気になるにつれてそれもなくなり、今はもうほとんどいつもと変わらぬ程落ち着いた気分になってきています。まあ時々は感情がひどく高ぶって、私の心をとても重くすることもありますけれど。

私は短気があの娘の最大の欠点だと言わなければなりません。さりとて、その欠点の扱い方の最良の方法を知っているわけではありません。ただ私は自分自身を落ち着かせ、短気をおこしたところで、行動の速さは少しも変わらないことをあの娘に教える一方で、不必要なものでも良い習わしである時には、あの娘をつまらなくさせないようにしたいと思います。が、こまごました事柄に、私のような優柔不断な人間が即座に決断してゆくことは、とてもむずかしいことです。でも、どの人もどの本も、決断は子どもの落ち着きに、そして必然的にその性質にとって重要な役割りを果たすと言っています。また、より良い扱い方をしようとして、子どもにあなたのためらいを見せるよりは、とりあえず、まあまあの扱い方を続ける方がずっと良いと言っています。私の言うのはただし、とりあえずのことです。将来、事あるごとにより良い方法を思い出して採り入れる沈着さを持つよう心がけなければなりません。

もう一つ、私自身が注意しようと思い、また召使達にも注意させようと思うことがあります。それは、気をそらすためにあの娘の注意をそこに無い物にむけない事、それから、約束を果たせないのに無条件であの娘と何かの約束をしないことです。勿論今では、あの娘は見慣れている人は皆わかります。以前より度は増したけれどあの娘は大そうな恥ずかしがり屋だとは思いません。しかし多くの人々は、子ども達が時々恥ずかしがるのは当然だというような、そんざいな配慮のない態度で子ども達を扱うのです。

さて今晩はこの辺で筆を置きましょう。かわいいあの娘について書くのでもなければ、再びこんなに長々と書くつもりはありません。

（津田塾女子大学）

註(1) ナッツフォードには、義叔母のラム夫人が住んでいる。
(2) ウェリントンには、夫ウィリアムの母が住んでいる。